

薄雲

渋谷栄一訳

第一章 明石の物語 母子の雪の別れ

「第一段 明石、姫君の養女問題に苦慮する」

冬になるにしたがつて、川辺の生活は、ますます心細さがつのつていつて、上の空のような心地ばかりしながら毎日を暮らしているのを、君も、やはり、「このまま過す」とは、できまい。あの、邸に近い所に移ることを決心なさい」

と、お勧めになるが、冷淡な気持ちを多くすっかり見てしまうのも、未練も残らないことになるだろうから、何と恨みを言ったらよいものだろうか」などというように思い悩んでいた。

「それでは、この若君を。こうしてばかりでは、不都合なことです。将来に期するところもあるのです、恐れ多いことです。対の君も耳にして、いつも見たがっているのですが、しばらくの間馴染ませて、袴着の祝いなどもひっそりとはなく催そうと思つ」

と、真剣にご相談になる。きつとそのようにおっしゃるだろう」とかねて思っていたことなので、ますます胸がつぶれる思いがした。

「今さら尊い人として大切に扱われなさつても、人が漏れ聞くだらうことは、かえつて、とりつくりにくくお思いになるのではないでしょうが」

と言つて、手放しがたく思っているのは、もっともなことではあるが、安心できない取り扱いを受けやしまいかなどと、決してお疑いなさいませぬ。あちらには、何年にもなるのに、このような子どももないのが、淋しい気がするので、前斎宮の大きくおなりでいらしゃるのをさえ、無理に

親代わりのお世話申しているようなので、まして、このようにあどけない年頃の人を、いいかげんなお世話はしない性格です」

などと、女君のご様子が申し分ないことをお話になる。

「ほんとに、昔は、どれほどの方に落ち着かれるのだらうかと、噂にちらつと聞いたご好心がすつかりお静まりになったのは、並大抵のご宿縁ではなく、お人柄のご様子もおおせいの方々の中でも優れていらつしやるからこそだらう」と想像されて、一人前でもない者がご一緒させていただける扱いでもないのに、それにもかかわらず、さし出たら、あの方も身の程知らずなど、お思いになるやも知れぬ。自分の身は、どうなつても同じこと。将来のある姫君のお身の上も、ゆくゆくは、あの方のお心次第であらう。そうとならば、なるほどこのように無邪気な間にお譲り申し上げようかしらと思つ。

また一方では、手放したら、不安でたまらないだらうこと。所在ない気持ちを慰めるすべもなくなつては、どのようにして毎日を暮らしてゆけようか。何を目当てとして、たまさかのお立ち寄りがあるだらうか」などと、さまざまに思い悩むにつけ、身の上のつらいこと、際限がない。

「第二段 尼君、姫君を養女に出すことを勧める」

尼君、思慮の深い人なので、

「つまりませぬ。お目にかかれなさいとは、とても胸の痛いことにちがひありませんが、結局は、姫君の御ためによいことだらうことを考えなさい。浅いお考えでおつしやることではあるまい。ただご信頼申し上げて、お渡し申されよ。母方の身分によつて、帝の御子もそれぞれに差がおりになるようです。この大臣の君が、世に二人といない素晴らしいご様子でありながら、朝廷にお仕えなさつているのは、故大納言が、いま一段劣つていらつしやつて、更衣腹と言われなさつた、その違いなのでいらつしやるようです。ましてや、臣下の場合では、比較することもできません。また、親王方、大臣の御腹といつても、やはり正妻の劣つているところよりは、世間も軽視し、父親のご待遇も、同等にできないものなのです。まして、この姫君は、身分の高い女君方にこのような姫君が、お生まれになつたら、すつかり忘

れ去られてしまつてしよう。身分相応につけ、父親にひとかどに大切にされた人こそは、そのまま軽んぜられないものとなるのです。御袴着の祝いも、どんなに一生懸命におこなつても、このような人里離れた所では、何の見栄えがありません。ただお任せ申し上げなされて、そのおもてなしくださるご様子を、見ていらつしやい」

と教える。

賢い人の将来の予想などにも、また占わせたりなどをして、やはりお移りになつた方が良いでしょう」とばかり言うので、気が弱くなつてきた。殿も、そのようにお思いになりながら、悲しむ人の気の毒さに、無理におつしやることもできないで、

「袴着のお祝いは、どのようにか」

とおつしやるお返事」

「何事につけても、ふがいないわたくしのもとにお置き申しては、お言葉どおり将来もおかわいそうに思われますが、またご一緒させていただいても、どんなにもの笑いになりますようやら」

と申し上げたので、ますますお気の毒にお思いになる。

吉田などをお選びになつて、ひっそりと、しかるべき事ならをお決めになつて準備させなされる。手放し申すことは、やはりとてもつらく思われるが、姫君のご将来のために良いことを第一に」と我慢する。

「乳母とも離れてしまつこと。朝な夕なの物思い、所在ない時を話相手にして、つね日頃慰めてきたのに、ますます頼りとするものがなくなることもまじ加わつて、どんなにか悲しい思いをせねばならないこと」と、女君も泣く。

乳母も、

「そうなるはずの宿縁だつたのでしようか、思いがけないことで、お目にかかるようになって、長い間のお心配りが、忘れがたくきつと恋しく思われなさいませうが、ふつと縁が切れることは決してありますまい。行く末はと期待しながら、しばらくの間であっても、別れ別れになつて、思いもかけないご奉公をしますのが、不安でございませうねえ」

などと、泣き泣き日を過ごしているうちに、十二月にもなつてしまつた。

「第三段 明石と乳母、和歌を唱和」

雪、霰の日が多く、心細い気持ちもいつそつとつて、不思議と何かにつけ、物思いがされるわが身だわ」と、悲しんで、いつもよりもこの姫君を撫でたり身なりを繕つたりしながら見ていた。

雪が空を暗くして降り積もつた翌朝、過ぎ去つた日々のことや将来のこと、何もかもお考え続けて、いつもは特に端近な所に出ていることなどはないのだが、汀の氷などを眺めやつて、白い衣の柔らかいのを幾重にも重ね着て、物思いに沈んでいる容姿、頭の恰好、後ろ姿などは、どんなに高貴なお方と申し上げても、こんなではいらつしやるう」と女房たちも見ると、落ちる涙をかき払つて、

「このよう日は、今にもましてどんなにか心淋しいことでしょう」と、痛々しげに嘆いて、

「雪が深いので奥深い山里への道は通れなくなるうとも、どうか手紙だけは、ください、跡の絶えないように」

とおつしやると、乳母、泣いて、

「雪の消える間もない吉野の山奥であろうとも必ず訪ねて行って、心の通う手紙を絶やすことは決してしません」

と言つて慰める。

「第四段 明石の母子の雪の別れ」

この雪が少し解けてお越しになつた。いつもはお待ち申し上げているのに、きつとそうであろうと思われるために、胸がどきりとして、誰のせいでもない、自分の身分低いせいだと思わずにはいられない。

「自分の一存によるのだわ。お断り申し上げたら無理はなされるまい。つまらないことを」と思わずにはいられないが、軽率なようなことだわ」と、無理に思い返す。

とてもかわいらしくて、前に座つていらつしやるのを御覧になると、おろそかには思えない宿縁の人だなあ」

とお思いになる。今年の春からのばしている御髪、尼削ぎ程度になつて、ゆらゆらとしてみごとで、顔の表情、目もとのほんのりとした美しさなど、

いまさら言うまでもない。他人の養女にして遠くから眺める母親の心惑いを推量なさると、まことに気の毒なので、繰り返して安心するように言つて夜を明かす。

「いいえ。取るに足りない身分でないようにお持てなしさえいただけしましたら」

と申し上げるものの、堪え切れずにほろつと泣く様子、気の毒である。

姫君は、無邪気に、お車に乗ることをお急ぎになる。寄せてある所に、母君自身抱いて出ていらつしやう。片言で、声はとてもかわいらしくて、袖をつかまえて、「お乗りなさい」と引つ張るのも、ひどく堪らなく悲しくて、「幼い姫君にお別れしていつになつたら、立派に成長した姿を見ることができるとしよう」

最後まで言い切れず、ひどく泣くので、

「無理もない。ああ、気の毒な」とお思いになつて、

「生まれてきた因縁も深いのだから、いつれ一緒に暮らせるようになりましよう。安心なさい」

と、慰めなされる。そうなることは思つて気持ちを落ち着けるが、とても堪えきれないのであつた。乳母の少将と言つた、気品のある女房だけが、御佩刀、天児のような物を持つて乗る。お供の車には見苦しくない若い女房、童女などを乗せて、お見送りに行かせた。

道中、後に残つた人の気の毒さを、どんなにつらからう。罪を得ることだろつか」とお思いになる。

「第五段 姫君、二条院へ到着」

暗くなつてお着きになつて、お車を寄せるや、華やかな感じ格別なので、田舎暮らしに慣れた人々の心地には、さぞや、きまりの悪い奉公をするこゝたにならうか」と思つたが、西面の部屋を特別に用意させなされて、数々の小さいお道具類をかわいらしげに準備させておありになつた。乳母の部屋には、西の渡殿の北側に当たる所を用意させておありになつた。

若君は、途中でお眠りになつてしまつていた。抱きおろされても、泣いたりなどなさらない。こちらでお菓子をお召し上がりなどなさるが、だん

だんと見回して、母君が見えないのを探して、いじらしげにべそかいていらつしやるので、乳母をお呼び出しになつて、慰めたり気を紛らわしてさし上げなされる。

「山里の所在なさは、以前にもましてどんなにであるうか」とお思いやりになると気の毒であるが、朝な夕なにお思いどおりにお世話しいしい、それを御覧になるのは、満足のいく心地がなされるだろつか」

「どうしてなのか、世間が非難する欠点のない子は、こちらにはお生まれにならないで」

と、残念にお思いになる。

しばらくの間は、女房たちを探して泣いたりなどなさつたが、だいたいが素直でかわいらしい性質なので、上にたいそうよく懐いてお慕いになるので、「とてもかわいらしい子を得た」とお思いになつた。余念もなく抱いたり、あやしなさうたりして、乳母も、自然とお側近くにお仕えするように慣れてしまつた。また、身分の高い人で乳の出る人を、加えてお仕えなされる。

御袴着のお祝いは、どれほども特別にご準備なされることもないが、その儀式は格別である。お飾り付けは、雛遊びを思わせる感じであつた。特に見える。参上なさつたお客たち、常日頃からも来客で賑わつていたので、特に目立つこともなかつた。ただ、姫君が禪を掛けていらつしやる胸元が、かわいらしさが加わつてお見えになつた。

「第六段 歳末の大堰の明石」

大堰では、いつまでも恋しく思われるにつけ、わが身のつたなさを嘆き加えていた。そうは言つたものの、尼君もひとしお涙もろくなつていて、このように大切にされていらつしやるのを聞くのは嬉しかった。いつたい、どんなことを、なまじお見舞い申し上げなされようか、ただ、お付きの人々に、乳母をはじめとして、非常に立派な色合いの装束を思い立つて、準備してお贈り申し上げなされるのであつた。

「訪れが間遠になるのも、ますます、思つたとおりだ」と思うだろつか、気の毒なので、年の内にこつそりとおいでになつた。

ますます寂しい生活で、朝な夕なのお世話する相手にさえお別れ申して、

寂しい思いをしていることが気の毒なので、お手紙なども絶え間なくお遣わしになる。

女君も、今では特にお恨み申し上げなさらず、かわいらしい姫君に免じて大目に見てさし上げていらっしやうた。

第二章 源氏の女君たちの物語 新春の女君たちの生活

「第一段 東の院の花散里」

年も変わった。うららかな空に、何の悩みもないご様子は、ますますおめでたく、磨き清められたご装飾に、年賀に参集なさる人で、年輩の人たちは、七日に、お祝いを申し上げに、連れ立っていらっしやうた。

若い人たちは、何ということもなく心地よさそうにお見えになる。次々に身分の低い人たちも、心中には悩みもあるであろうが、表面は満足そうに見える、今日このごろである。

東の院の対の御方も、様子は好ましく、申し分ない様子で、伺候している女房たち、童女の姿など、きちんとして、気配りをしいしい過ごしていらっしやるが、近い利点はこの上なくて、のんびりとしたお暇な時などには、ちよっとお越しになうたりなさるが、夜のお泊まりなどように、わざわざお見えになることはない。

ただ、「ご性質がおおようでおつとりとして、」このような運命であつた身の上なのだろう」として思い込み、めつたにないくらい安心でゆつたりしていらっしやるので、季節折ごとのお心配りなども、こちらの様子にひどく劣るような差別はなくご待遇なさって、軽んじ申し上げるようなこととはないので、同じように人々が大勢お仕え申して、別当連中も勤務を怠ることなく、かえって、秩序立っていて、感じのよいご様子である。

「第二段 源氏、大堰山荘訪問を思いつく」

山里の寂しさを絶えず心配なさっているので、公私に忙しい時期を過

して、お出かけにならうとして、いつもより特別にお粧いなさうて、桜のお直衣に、何ともいえない素晴らしい御衣を重ねて、香をたきしめ、身繕いなさうて、お出かけのご挨拶をなさる様子、隈なく射し込んでいる夕日に、ますます美しくお見えになるのを、女君、おだやかならぬ気持ちでお見送り申し上げなさる。

姫君は、あどけなく御指貫の裾にまつわりついて、お慕い申し上げなさるうちに、御簾の外にまで出てしまひそうなので、立ちどまつて、とてもかわいいとお思ひになつた。なだめすかして、「明日帰つて来ましよう」と口ずさんでお出になると、渡殿の戸口に待ちかまえさせて、中将の君をして、申し上げさせなさうた。

「あなたをお引き止めするあちらの方がいらっしやらないのなら 明日帰つてくるあなたと思つてお待ちいたしましようが」

「たいそつもの慣れて申し上げますので、いかにもにっこりと微笑んで、ちよっと行つてみて明日にはすぐに帰つてこよう かえつてあちらが機嫌を悪くしようとも」

「何ともわからないではしやぎまわつていらっしやる姫を、上はかわいらしいと御覧になるので、あちらの人の不愉快さも、すっかり大目に見る氣になつていらっしやうた。」

「どう思つているだらうか。自分だつて、とても恋しく思はずにはいられないのに」

「と、じつと見守りながら、ふところに入れて、かわいらしいお乳房をお含ませながら、あやしていらっしやるご様子、どこから見ても素晴らしいお側に仕える女房たちは、

「どうしてかしら。同じお生まれになるなら」

「ほんとうにね」

などと、話し合つていた。

「第三段 源氏、大堰山荘から嵯峨野の御堂、桂院に回る」

あちらでは、まことのんびりと、風雅な嗜みのある感じに暮らして、邸の有様も、普通とは違つて珍しいうえに、本人の態度などは、会うたび

「ごに、高貴な方々にひどく見劣りする差は見られず、容貌や、心ばせも申し分なく成長していく。

「ただ、普通の評判で目立たないなら、そのような例はないでもないと思つてもよいのだが、世にもまれな偏屈者だという父親の評判など、それが困つたものだ。人柄などは、十分であるが」などとお思いになる。

ほんのわずかの逢瀬で、物足りないくらいだからであろうか、あわただしくお帰りになるのも気の毒なので、夢の中の浮橋か」とばかり、ついお嘆きになられて、箏の琴があるのを引き寄せて、あの明石で、夜更けての音色も、いつもどおりに自然と思ひ出されるので、琵琶を是非にとお勧めになると、少し掻き合わせたのが、どうして、これほど上手に何でもお弾きになれたのだろう」と思わずにはいらつしやれない。若君の御事など、こまごまとお話しになつてお過ぎになる。

「ここは、このような山里であるが、このようにお泊まりになる時々があるのです、ちよつとした果物や、強飯ぐらひはお召し上がりになる時もある。近くの御寺、桂殿などにお出かけになるふうに装い装いして、一途にのめり込みなさないが、また一方、まことにはつきりと中途半端な普通の相手としてはお扱いなさないなどは、愛情も格別深く見えるようである。女も、このようなお心をお知り申し上げて、出過ぎているとお思いになるようなことはせず、また、ひどく低姿勢になることもせず、お心づもりに背くこともなく、たいそう無難な態度でいたのであつた。並々でない高貴な婦人方の所でさえ、これほど気をお許しになることもなく、礼儀正しいお振る舞いであることを、聞いていたので、

「近い所で一緒にいたら、かえつてますます目慣れて、人から軽蔑されることなどもあろう。時たまでも、このようにわざわざお越しくださるほうが、たいした気持ちがある」と思つたのである。

明石でも、あは言つたが、このお心づもりや、様子を知りたくて、気がかりでないように、使者を行き来させて、胸をどきりとさせることもあつたり、また、面目に思うことも多くあつたりするのであつた。

「第一段 太政大臣薨去と天変地異」

そのころ、太政大臣がお亡くなりになつた。世の重鎮としていらつしやつた方なので、帝におかせられてもお嘆きになる。しばらくの間、籠もつていらつしやつた間でさえ、天下の騒ぎであつたので、その時以上に、悲しむ人々が多かつた。源氏の大臣も、たいそう残念に、万事の政務、お譲り申し上げてこそ、お暇もあつたのだが、心細く政務も忙しく思われなさつて、嘆いていらつしやる。

帝は、お年よりはこの上なく大人らしく御成人あそばして、天下の政治も心配申し上げなされるような必要はないのだが、また特別にご後見なされる適当な方もいないので、誰に譲つて静かに出家の本意をかなえられようか」とお思いになると、まことに残念でならない。

「ご法事などにも、ご子息やお孫たち以上に、心をこめてご甲問なさり、御世話なされるのであつた。

その年は、いつたいに世の中が騒然として、朝廷に対して、何事かの前兆が頻繁に現れ、不穩で、

「天空にも、いつもと違つた月や日や星の光りが見えて、雲がたなびいている」

とばかり言つて、世間の人の驚くことが多くて、それぞれの道の勸文を差し上げた中にも、不思議で世に尋常でない事柄が混じつていた。内大臣だけは、ご心中に、厄介にそれとお分りになることがあるのであつた。

「第二段 藤壺入道宮の病臥」

入道後の宮は、春の初めころからずつとお悩みになつて、三月にはたいそう重くおなりになつたので、行幸などがある。院に御死別申し上げられたころは、とても幼くて、深くもお悲しみにはならなかつたが、たいそうお嘆きの御様子なので、宮もとても悲しく思はずにはいらつしやれない。

「今年、必ずや逃れることのできない年回りと思つておりましたが、それほどひどい気分ではございませんでしたので、寿命を知っている顔をします

ようなもの、人もいやに思い、わざとらしいと思つたろうと遠慮して、功德の事なども、特に平素よりも取り立てて致しませんでした。参内して、ゆつくりと昔のお話でもなどと思つておりながら、気分がすっきりした時が少なうございまして、残念にも、鬱々として過ごしてしまいましたこと。」

と、たいそう弱々しくお申し上げなされる。

三十七歳でいらつしやるのであつた。けれども、とてもお若く盛りでいらつしやるご様子を、惜しく悲しく押し上げあそばす。

「お慎みあそばさねばならないお年回りであるが、気分もすぐれず、何か月かをお過ごしになることでさえ、嘆き悲しんでおりましたのに、ご精進などをも、いつもより特別になさらなかったことよ。」

と、ひどく悲しくお思いであつた。つい最近に、気づいて、いろいろなご祈禱をおさせあそばす。今までは、いつものご病氣とばかり油断していたのだが、源氏の大臣も深くご心配になっていた。一定のきまりがあるので、間もなくお帰りあそばすのも、悲しいことが多かつた。

宮は、ひどく苦しくて、はきはきとお話し申し上げることができない。ご心中思い続けなされるに、高い宿縁、この世の繁栄も並ぶ人がなく、心の中に物足りなく思うことも人一倍多い身であつたと思わずにはいらつしやれない。主上が、夢の中にも、こうした事情を御存じあそばされないので、それでもやはりお氣の毒に押し上げなさつて、この事だけを、気がかりで心の晴れないこととして、死後にも思い続けそうな氣がなされるのであつた。

「 第三段 藤壺入道宮の崩御 」

大臣は、朝廷の立場からしても、こうした高貴な方々ばかりが、引き続きでお亡くなりになることをお嘆きになる。人には知られない思慕は、それはまた、限らないほどで、ご祈禱などお気づきにならないことはない。長年思い絶つていたことさえ、もう一度申し上げられなくなつてしまつたのが、ひどく残念に思われなされるので、近くの御几帳の側に寄つて、ご容態など、しかるべき女房たちにお尋ねになると、親しい女房だけがお付きしていて詳しく申し上げる。

「この数か月ずっとご気分がすぐれずにいらつしやいましたのに、お勤めを

少しの間も怠らなくなさいました疲労も積もつて、ますますひどく衰弱あそばしたところに、最近になつては、柑子などにさえ、お口にあそばされなくなりましたので、ご回復の希望もなくなつておしまいになりましたことです。」

と言つて、泣き嘆き悲しんでいる女房たちが多かつた。

「故院のご遺言とおりに、帝のご後見をなさること、長年存じておりますことは多かつたのですが、何かの機会に、そのお礼の気持ちが大抵でないことを、ちらつと知つていたただこうとばかり、氣長に待つておりましたが、今は悲しく残念に思われまして。」

と、かすかに仰せになるのも、ほのかに聞こえるので、お返事も十分に申し上げられず、お泣きになる様子、実においたわしい。どうしてこうも氣が弱い状態で」と、人目を憚つてお氣を取り直しなされるが、昔からのご様子を、世間一般から見ても、もつたいなく惜しいご様子のお方を、思いどおりにならないことなので、お引き止め申すすべもなく、何とも言いようもなく悲しいこと限らない。

「取るに足りないわが身ですが、昔から、ご後見申し上げねばならないことは、氣のつく限り、一生懸命に存じておりましたが、太政大臣がお亡くなりになつたことだけでも、この世の、無常迅速が存じられてなりませんのに、さらにまた、このようにいらつしやいますと、何から何まで心が乱れまして、生きていることも、残り少ない氣が致します。」

などとお申し上げになつていらっしゃるうちに、燈火などが消えるようにしてお隠れになつてしまつたので、何とも言いようがなくお悲しい別れを嘆きになる。

「 第四段 源氏、藤壺を哀悼 」

恐れ多い身分のお方と申し上げた中でも、ご性質などが、世の中の例としても広く慈悲深くいらつしやつて、権勢を笠に着て、人々が迷惑することを自然と行ないがちなのだが、少しもそのような道理に外れた事はなく、人々が奉仕することも、世の苦しみとなるはずのことは、お止めになる。

功德の方面でも、人の勧めに従いなさつて、莊嚴に珍しくらい立派に

なさる人なども、昔の聖代には皆あつたのだが、この后宫は、そのようなこともなく、ただもとからの財産、頂戴なさるはずの年官、年爵、御封のしかるべき収入だけで、ほんとうに真心のこもつた供養の最善をしておかれなつたので、物のわけも分らない山伏などまでが惜しみ申し上げる。

「ご葬送の時に、世を挙げての騒ぎで、悲しいと思わない人はいない。殿上人など、すべて黒一色の喪服で、何の華やかさも無い晩春である。二条院のお庭先の桜を御覧になるにつけても、花の宴の時などをお思い出しになる。今年ぐらひは」と独り口ずさみなさつて、他人が変に思うに違いないので、御念誦堂にお籠もりなさつて、一日中泣き暮らしなさる。夕日が明るく射して、山際の梢がくつきりと見えるところに、雲が薄くたなびいているのが、鈍色なのを、何ごともお目に止まらないころのだが、たいそう悲しく思わずにはいらつしやれない。

「入日射している峰の上にたなびいている薄雲は 悲しんでいるわたしの喪服の袖の色に似せたのだろうか」

誰も聞いていない所なので、かいが無い。

第四章 冷泉帝の物語 出生の秘密と讓位ほのめかし

「第一段 夜居僧都、帝に密奏」

「ご法事なども終わつて、諸々の事柄も落ち着いて、帝、何となく心細くお思ひであつた。この入道の宮の母后の御代から伝わつて、代々のご祈祷の僧としてお仕えしてきた僧都、故宮におかれてもたいそう尊敬なさつて信頼していらつしやつたが、帝におかせられても御信任厚くて、重大な御勅願をいくつもお立てになつて、実にすぐれた僧侶であつたが、年は七十歳ほどで、今は自分の後生を願うための勤行をしようと思つて籠もつていたのだが、宮の御事のために出て来ていたのを、宮中からお召しがあつて、いつも伺候させてお置きになる。

これからは、やはり以前同様に参内してお仕えするように、大臣もお勧めおつしやるるので、

「今では、夜居のお勤めなどは、とても堪えがたく思われますが、お言葉の恐れ多いのによつて、昔からのご厚志に感謝を込めて」

「と云つて、お仕えしたが、静かな暁に、誰もお側近くにいないで、ある人は里に退出などしていた折に、老人っぽく咳をしながら、世の中の事どもを奏上なさるついでに、

「まことに申し上げにくく、申し上げたらかえつて罪に当たろうかと憚り存じられることが多いのですが、御存じでないために、罪が重くて、天眼が恐ろしく存じられますことを、心中に嘆きながら、寿命が終わつてしまいましたならば、何の益がございませうか。仏も不正直なお思ひになるでしょう」

とだけ申し上げかけて、それ以上言えないことがある。

「第二段 冷泉帝、出生の秘密を知る」

帝は、「何事だろう。この世に執着の残るよう思うことがあるのだろうか。法師は、聖僧といつても、道に外れた嫉妬心が深く、困つたものだから」とお思ひになつて、

「幼かつた時から、隔てなく思つていたのに、そなたには、そのように隠してこられたことがあつたとは、つらく思いますぞ」と仰せになると、

「ああ恐れ多い。少しも、仏の禁じて秘密になさる真言の深い道でさえ、隠しとどめることなくご伝授申し上げております。まして、心に隠していることは、何がございませうか。」

これは、過去来世にわたる重大事でございますが、お隠れあそばしました院、后の宮、現在政治をお執りになつていらっしゃる大臣の御ために、すべて、かえつてよくないこととして漏れ出すことがありはしまいか。このような老法師の身には、たとい災いがありましょつとも、何の悔いもありません。仏天のお告げがあることによつて申し上げるのでございます。

わが君がご胎内にいらつしやつた時から、故宮には深く悲嘆なられることがあつて、ご祈祷をおさせになる仔細がございました。詳しいことは法師の心には理解できません。思いがけない事件が起こつて、大臣が無実の

罪に当たりなされた時、ますます恐ろしくお思いあそばされて、重ねてご祈禱を承りましたが、大臣もご理解あそばして、またさらにご祈禱を仰せつけになって、御即位あそばした時までお勤め申した事がございました。

その承りましたご祈禱の内容は」

と言つて、詳しく奏上するのをお聞きあそばすと、驚くほどめつたにないことで、恐ろしくも悲しくも、さまざまにお心がお乱れになった。

しばらくの間、返事もないので、僧都、進んで奏上したのを不都合にお思いになったのだからか」と、困つたことに思つて、静かに恐縮して退出するのを、お呼び止めになつて、

「知らずに過ぎてしまつたならば、来世までも罪があるに違ひなかつたことを、今まで隠しておられたのを、かえつて安心のならない人だと思つた。またこの事を知つていて誰かに漏らすような人はいるだろうか」と仰せになる。

「いえまつたく、拙僧と王命婦以外の人は、この事の様子を知つている者はございません。それだから、実に恐ろしいのでございます。天変地異がしきりに現れ、世の中が平穩でないのは、このせいです。御幼少で、物の道理を御分別おできになれなかつた間はよろしうございましたが、だんだんと御年齢が加わつていらつしやいまして、何事も御分別あそばせるころになつたので、咎を示すのです。万事、親の御代より始まるもののようにございます。何の罪とも御存知あそばさないのが恐ろしいので、忘れ去るうとしていたことを、あえて申し上げた次第です」

と、泣く泣く申し上げるうちに、夜がすつかり明けてしまつたので、退出した。

主上は、夢のような心地で重大な事をお聞きあそばして、さまざまにお思い乱れなされる。

「故院の御為にもお気がとがめ、大臣がこのように臣下として朝廷に仕えていらつしやるのも、もつたないこと」

あれこれと御煩悶なさつて、日が高くなるまでお出ましにならないので、「これこれしかじかである」とお聞きになつて、大臣も驚いて参内なさつたのを、お目にかかりあそばすにつけても、ますます堪えがたくお思いになつて、お涙がこぼれあそばしたのを、

「おおかた故母宮の御事を、涙の乾く間もなくお悲しみになつていらっしゃるのだから」

と押し上げなされる。

「第三段 帝、讓位の考えを漏らす」

その日、式部卿の親王がお亡くなりになつた旨を奏上するので、ますます世の中の穩やかならざることをお嘆きになつた。このような状況なので、大臣は里にもご退出になることができず、付ききりでいらつしやる。

しんみりとしたお話のついでに、

「わが寿命は終わつてしまつたのであつるか、何となく心細くいつもと違つた心地がします上に、世の中もこのように穩やかでないので、万事落ち着かない気がします。故宮がご心配なさるからと思つて、帝位のことも遠慮しておりましたが、今では安樂な状態で世を過ごしたく思つています」

と御相談申し上げなされる。

「まつたくとんでもないお考えです。世の中が静かでないことは、必ずしも政道が真つ直ぐ、また曲がつていることによるのではございません。すぐれた世でも、よくないことどもはございました。聖の帝の御世にも、横ざまの乱れが出てきたこと、唐土にもございました。わが国でもそうでございます。まして、当然の年齢の方々が寿命の至るのも、お嘆きになることではございません」

などと、なにかにつけたくさんのことがらを申し上げなされる。その一部分を語り伝えるのも、とても気がひける。

いつもより黒いお召し物で、喪に服していらつしやるご容貌、違つていゝるがない。主上も、いく年もお鏡を御覧になるにつけ、お気づきなつていゝることであるが、お聞きあそばしたことの後は、またしげしげとお顔を御覧になりながら、格別にいつそつしみじみとお思いなされるので、何とかして、このことをちらつと申し上げたい」とお思いになるが、何といてもやはり、きまりが悪くお思いになるに違ひないことなので、お若い心地から遠慮されて、すぐにお話申し上げられないあいだは、世間一般の話をいつもより特に親密にお話し申し上げあそばす。

慇懃にかしこまつていらつしやるご態度で、とても御様子が変わつてゐるのを、すぐれた人のお眼には、妙だと押し上げなかつたが、とてもこのように、はつきりとお聞きあそばしたとはお思いもよりなさらなかつたのであつた。

「第四段 帝、源氏への譲位を思う」

主上は、王命婦に詳しいことは、お尋ねになりたくお思いになつたが、今さら、そのようにお隠しになつていらつしやつたことを知つてしまつたと、あの人にも思われまい。ただ、大臣に何とかそれとなくお尋ね申し上げて、昔にもこのような例はあつたらうかと聞いてみたい」

とお思いになるが、まかつたその機会もないので、ますます御学問をあそばしては、さまざまの書籍を御覧になるのだが、

「唐土には、公然となつたのもまた内密のもの、血統の乱れている例がとても多くあつた。日本には、まかつた御覧になつても見つからない。たといあつたとしても、このように内密のことを、どうして伝え知る方法があるといふのか。一世の源氏、また納言、大臣となつて後に、さらに親王にもなり、皇位にもおつきになつたのも、多数の例があつたのであつた。人柄のすぐれたことにかこつけて、そのようにお譲り申し上げようか」

などと、いろいろお考えになつたのであつた。

「第五段 源氏、帝の意向を峻絶」

秋の司召で、太政大臣におなりになるようなことを、内々にお定め申しなされる機会に、帝が、かねてお考えの意向を、お洩らし申し上げられたので、大臣、とても目も上げられず、恐ろしくお思いになつて、決してあつてはならないことである趣旨の「辞退を申し上げなされる。

「故院のお志、多数の親王たちの中で、特別に御寵愛くださりながら、御位をお譲りあそばすことをお考えあそばしませんでした。どうして、その御遺志に背いて、及びもつかない位につけましようか。ただ、もとのお考えどおりに、朝廷にお仕えして、もう少し年を重ねたならば、のんびりとし

た仏道にひき籠もりましようと思つて存じております」

と、いつものお言葉と変わららずに奏上なされるので、まことに残念にお思ひになつた。

太政大臣におなりになるよう決定があるが、今しばらく、とお考えになるところがあつて、ただ位階が一つ昇進して、牛車を聴されて、参内や退出をなされるのを、帝、もの足りなく、もつたいないこととお思い申し上げなまつて、やはり親王におなりになるよう仰せになるが、

「政治の「後見をおできになる人がいない。権中納言が、大納言になつて右大将を兼任していらつしやるが、もう一段昇進したならば、何ごとも譲らう。その後、どうなるにせよ、静かに暮らそう」

とお思いになつていた。さらにあれこれ、お考えめぐらすと、

「故后宮のためにも気の毒であり、また主上のこのようにお悩みでいらつしやるのを押し上げなされるにも恐れ多くて、誰がこのようなことを洩らしお耳に入れ申したのだらうか」

と、不思議に思わずにはいらつしやれない。

王命婦は、御匣殿が替わつたところに移つて、お部屋を賜つて出仕していた。大臣、お目にかかりなまつて、

「このことを、もしや、何かの機会に、少しでも洩らしお耳に入れ申されたことはありましたか」

とお尋ねになるが、

「けつして、少しでも帝のお耳に入りますことを、大変だと思ひ召して、しかしまた一方では、罪を得ることではないかと、主上の御身の上を、やはりお案じあそばして嘆いていらつしやいました」

と申し上げるにつけても、並々ならず思慮深い方でいらつしやつたご様子などを、限りなく恋しくお思い出し申し上げなされる。

第五章 光る源氏の物語 春秋優劣論と六条院造営の計画

「第一段 齋宮女御、二条院に里下がり」

齋宮の女御は、「ご期待どおりのご後見役で、たいそうな御寵愛である。お心づかい、態度なども、思うとおりに申し分なくお見えになるので、もつたいない方と大切にお世話申し上げなさっていた。

秋ごろに、二条院に里下がりなさった。寝殿のご設備、いっそう輝くほどになさって、今ではまったくの実の親のような態度で、お世話申し上げていらつしやる。

秋の雨がとても静かに降って、お庭先の前栽が色とりどりに乱れている露がいつぱい置いてあるので、昔のことがらがそれからそれへと自然と続けて思い出されて、お袖も濡らし濡らして、女御の御方にお出向きになった。色の濃い鈍色のお直衣姿で、世の中が平穩でないのを口実になさって、そのまま御精進なので、数珠を袖に隠して、体裁よく振る舞っていらつしやるのが、限りなく優美なご様子で、御簾の中にお入りになった。

「第二段 源氏、女御と往時を語る」

御几帳だけを隔てて、「ご自身でお話し申し上げなさる。

「どの前栽もすっかり咲きほころびましたね。まことにおもしろくない年ですが、得意そうに時節を心得顔に咲いているのが、胸打たれますね」

と云って、柱に寄りかかっていらつしやる夕映えのお姿、たいそう見事である。昔のお話、あの野宮をさまよった朝の話などを、お話し申し上げなさる。まことにしみじみとお思いになった。

宮も、「こうだから」とであるうか、少しお泣きになる様子、とても可憐な感じで、ちよつとお身じろぎなさる気配も、驚くほど柔らかに優美でいらつしやるようだ。「拝見しないのは、まことに残念だ」と、胸がどきどきするのは、困ったことであるよ。

「過ぎ去った昔、特に思い悩むようなこともなくて過せたはずでございまして時分にも、やはり性分で、好色沙汰に関しては、物思いも絶えずございましてなあ。よくない恋愛事の中で、気の毒なことをしたことが多数ありました中で、最後まで心も打ち解けず、思いも晴れずに終わったことが、二つあります。

一つは、あなたのお亡くなりになった母君の御ことです。驚くほど物

を思いつめてお亡くなりになってしまったことが、生涯の嘆きの種と存じられました。このようにお世話申して、親しくしていただけるのを、せめて罪滅ぼしのように存じておりますが、燃えた煙が、解けぬままになつてしまわれたのだからとは、やはり気がかりに存じられてなりません」

とおつしやって、もう一つは話されずに終わった。

「ひところ、身を沈めておりましたとき、あれこれと考えておりましたことは、少しづつ叶ってきました。東の院にいる人が、頼りない境遇で、ずっと気の毒に思っておりましたのも、安心できる状態になっております。氣立てがよいところなど、わたしも相手もよく理解し合っていて、とてもさっぱりとしたものです。

このように帰って来て、朝廷のご後見致します喜びなどは、それほど心に深く思いませんが、このような好色めいた心は、鎮めがたくばかりおりますが、並々ならぬ我慢を重ねたご後見とは、ご存知でいらつしやいます。うか。せめて同情するだけでもおつしやっていただけなければ、どんなにか張り合いのないことでしょう」

とおつしやるので、困ってしまつて、お返事もないので、

「やはり、そうですね。ああ情けない」

と云って、他の話題に転じて紛らしておしまひになった。

「今では、何とか心安らかに、生きている間は心残りがないように、来世のためのお勤めを思う存分に、籠もつて過ごしたいと思っておりますが、この世の思い出にできることがございせんのが、何といても残念なことでございます。きつと、幼い姫君がおりますが、将来が待ち遠しいことですよ、恐れ多いことですが、何と云つても、この家を繁栄させなさつて、わたしが亡くなりました後も、お見捨てなさらぬでください」

などお申し上げなさる。

お返事は、とてもおつとりとした様子で、やっと一言ほどわずかにおつしやる感じ、たいそう優しそうなのに聞き入って、しんみりと日が暮れるまでいらつしやる。

「第三段 女御に春秋の好みを問う」

「頼もしい方面の望みはそれとして、一年の間の移り変わる四季折々の花や紅葉、空の様子につけても、心のゆく楽しみをしてみたいものです。春の花の林や、秋の野の盛りについて、それぞれに論争してありますが、その季節の、まことにそのとおりと納得できるようなはっきりとした判断はないようでございます。」

唐土では、春の花の錦に匹敵するものはないと言っているようでございます。和歌では、秋のしみじみとした情緒を格別にすぐれたものとしています。どちらも季節折々につけて見ており、目移りして、花や鳥の色彩や音色の美しさを判別することができません。

狭い邸の中だけでも、その季節の情趣が分かる程度に、春の花の木を一面に植え、秋の草をも移植して、つまらない野辺の虫たちを棲ませて、皆様にも御覧に入れようと存じておりますが、どちらをお好きでしょうか？」

と申し上げなされると、とてもお答え申しにくいことと思ひになるが、まるつきり何ともお答え申し上げなされないのも具合が悪いので、

「まして、どうして優劣を弁えることができましょうか。おっしゃるとおり、どちらも素晴らしいですが、いつとても恋しくないことはない中で、不思議にと聞いた秋の夕べが、はかなくお亡くなりになった露の縁につけて、自然と好ましく存じられます。」

と、とりつくるわなないようにおっしゃって言いさしなされるのが、実にかわいらしいので、堪えることがおできになれず、

「あなたもそれでは情趣を交わしてください、誰にも知られず、自分ひとりでしみじみと身にしみて感じている秋の夕風ですから、我慢できないことも度々ございますよ。」

と申し上げなされると、どのようなお返事ができよう、分かりません」とお思ひのご様子である。この機会に、抑えきれずに、お恨み申し上げなすることがあるにちがいない。

もう少いで、間違ひもしてかきなされるところであるが、とてもいやだと思ひでいるのも、もつともなので、またご自分でも、若々しく良くないことだ」とお思ひ返しなされて、お嘆きになっていらっしやる様子が、思慮深く優美なもの、氣にくわなくお思ひになった。

少しずつ奥の方へお入りになって行く様子なので、

「驚くほどお嫌いになるのです。ほんとうに情愛の深い人は、このようにはしないものと言います。よし、今からは、お憎みにならないでください。つらいことでしょう。」

とおっしゃって、お渡りになった。

しつとりとした香が残っているのまでが、不愉快にお思ひになる。女房たち、御格子などを下ろして、

「この御褥の移り香は、何とも言えないですね。」

「どうしてこう、何から何まで柳の枝に花を咲かせたようなご様子なのでしょう。」

「氣味が悪いまでに。」

とお噂申し上げていた。

「第四段 源氏、紫の君と語りつ」

西の対にお渡りになって、すぐにもお入りにならず、たいそう物思いに耽つて、端近く横におなりになった。燈籠を遠くに掛けて、近くに女房たちを伺候させなされて、話などをさせになる。

「このように無理な恋に胸がいっぱいになる癖が、いまも残っていたことよ」と、自分自身反省せずにはいらっしやれない。

「これはまことに相応しくないことだ。恐ろしく罪深いことは多くあつたろうが、昔の好色は、思慮の浅いころの過ちであつたから、仏や神もお許しになったことだろう。」

と、心をお鎮めになるにつけても、やはり、この恋の道は、危なげなく思慮深さが増してきたものだな。」

とお思ひ知られなされる。

女御は、秋の情趣を知っているようにお答え申し上げたのも、悔しく恥ずかしい」と、独り心の中でよくよなされて、悩ましそうにさえなされているのを、実にさっぱりと何くわぬ顔で、いつもよりも親らしく振る舞っていらっしやる。

女君に、

「女御が、秋に心を寄せていらっしやるのも感心されますし、あなたが、春

の曙に心を寄せていらつしやるのもつとものです。季節折々に咲く木や草の花を鑑賞しがてら、あなたのお気に入るような催し事などをしてみたいものだ、公私ともに忙しい身には相応しくないが、何とかして望みを遂げたいものですと、ただ、あなたにとつて寂しくないだろうかと思つのが、気の毒なのです」

などと親密にお話申し上げになる。

「第五段 源氏、大堰の明石を訪う」

「山里の人も、どうしているだろうか」などと、絶えず案じていらつしやるが、窮屈さばかりが増していくお身の上で、お出かけになること、まことにむずかしい。

「夫婦仲をつまらなくつらいと思つている様子だが、どうしてそのように考える必要がある。気安く出て来て、並々の生活はするまいと思つている」が、思い上がった考えだ」とはお思いになる一方で、不憫に思つて、いつもの、不断の御念仏にかこつけて、お出向きになった。

住み馴れていくにしたがつて、とてももの寂しい場所の様子なので、たいてい深い事情がない人でさえ、きつと悲哀を増すであろう。まして、お逢い申し上げるにつけても、つらかつた宿縁の、とはいえ、浅くないのを思つと、かえつて慰めがたい様子なので、なだめかねなさる。

たいそう茂つた木立の間から、いくつもの篝火の光が、遣水の上を飛び交う螢のように見えるのも趣深く感じられる。

「このような生活に馴れていなくなつたら、さぞ珍しく思えたでしょう」と、とおつしやる。

「あの明石の浦の漁り火が思い出されますのは、わが身の憂さを追つてこゝまでやつて来たのでしょうか、間違われそつとございます」

と申し上げると、

「わたしの深い気持ちをお存知ないからでしょうか、今でも篝火のようにゆらゆらと心が揺れ動くのでしよう、誰が憂きものと、させたでしょう」と、逆にお恨みになつていらつしやる。

「だいたい自然と物静かな思いにおなりの時候なので、尊い仏事にご熱

心になつて、いつもよりは長くご滞在になつたのであろうか、少し物思いも慰められたらう、と言つことである。

